
色々間違えた異世界トリップ

真紅色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色々と間違えた異世界トリップ

【Nコード】

N9885V

【作者名】

真紅色

【あらすじ】

俺は影野神斗。特別な力を持った高校生だ！……………中
二病とか言っな！

俺は影野神斗 カゲノジント。佐藤孝明 サトウタカアキ
はダサイので捨てた。

普段は平凡な高校生のだが、実は俺の右目と左腕には闇の力が封じられており、世界の危機が近づくとその封印が解けて本当の力を発揮することができるのだ。

特に右目は封印状態でも人を狂わせてしまうほどの力を持ち、それを隠す為には常に眼帯をつける必要があった。面倒ではあったが、強大な力を持つ者の宿命と言った所だ、甘んじて受け入れた。

多少目立ってしまった外見ではあったが、俺は表舞台には出ないようにしてきた。

余り騒がれても困るからな。なんといっても世界を救う英雄となる人間だ。

.....認めよう。それは俺が考えた“設定”であると！

思い返すと涙が止まらないような日々の繰り返しだった。

最初は乗ってくれた幼馴染には冷たい目で諭され、クラスメイトには『なにアレきもーい』と避けられた。

そんな中で俺は自分の中に特別な力があると信じ続けた。

そして！ その全てが報われるときがきたのだ！

正確には俺の中にあつた力ではなかったのだが、そんな事はどうでもいい。

今俺の目の前には神様が立っていた。見るからに100歳を超えていそうな白髭のジジイ。出来れば幼女のかみさまが良かったのだが、これはさすがに贅沢というものだろう。

そのジジイは言った。

「今から異世界へ行つて魔王を倒しその世界を救うのじゃ」

もちろん俺は頷いた。二つ返事どころかジジイの言葉が終わる前に叫んでいた気さえする。

「もちろんだ！」

なんてつたつて異世界だ。勇者だ。世界、救っちゃうんだぜ？

小躍りどころか裸で駆け出したい気分だった。しかしそれは主人公的にクールではないのでしない。ここは少し長めの黒い前髪を撫でつつ「ふっ」とキメてみる。

ジジイの反応を伺おうとするが、既に姿が見えなくなっていた。あたり一面真っ白な光だけ。無視された寂しさとネタを外した恥ずかしさが半々くらいに押し寄せる。

けど泣かないし動揺しない。勇者とは常にカツコイイ存在なのだ。

そういえば、俺の能力ってどんなものなんだろうか。聞くのを忘れ

てしまっていた。

もちろん最強なのは当然だが。出来れば闇系統の能力を希望したい。そんな俺の心を読んだかのように、何も無い光の空間に一枚の紙が現れる。

ノートの切れ端のような汚い形をしているそれにはこう書かれていた。

『のうりよくせつめいしよ』

めちやくちや汚い文字だった。急いで書きました感溢れる上に平仮名である。幼女なかみさまが一生懸命書いたものなら一文字ずつを丁寧に舐めるように読むのだが、生憎これはさっきのジジイが書いたものだろう。萌えないどころの騒ぎではない。

そして肝心の能力の内容は裏面に記されていた。表と同じように。

4

『とにかくつよい。』

なんじゃそりゃ。説明不足にもほどがあると怒鳴りたい。しかもなぜか終わりに丸（『。』。これのことね）を付けている。変なところに凝る位なら、読みやすいように漢字で書く努力をしてくれ。

というかこんな雑な扱いでいいの俺？ 世界救う重要人物じゃないの？ というか異世界に行く事になった経緯、俺全然覚えてないよ？
トラックが病死か、はたまた何らかの事件に巻き込まれたか………
…。

異世界へ行く理由というのはそれなりに重要なファクターだと思うんだ。

まあ俺の事だ、大層カツコイイ死に様だったのだろう。

全く覚えてない自らの偉業を想い鼻を鳴らす。

覚えていないというのも、これはこれで色々妄想　想像が膨らむな。

「そんなことは置いておくとして」

お、今の独り言、らしかったな。やっぱり物語の主人公と言ったらこれだな。これから多用するとしよう。

と、余計な考えは置いておこう。

「まずは力の確認だ。異世界行って魔物に食われて即終了、じゃ笑えないってレベルじゃない」

最初に行うのは目を瞑り手の先に意識を集中させ、光の弾を放出するイメージ。

何かが発射された感触がした。確認のため目を開けてもう一度。

すると手のひら大の、俺の想像通りの光弾が飛び出て行くのが見えた。しかも超高速で。

しかし的がないとなんとも言いがたい。

実際に当ててみたら水玉のように弾けておしまいでは困る。そんなのは学校の隠し芸大会でしか役に立たない。……………思い出したくない去年の惨状が一瞬脳裏に映る。涙が出てきた。

「何か大きな的は……………丁度いいのがあるな」

途轍もなくデカイ黒い何か。口が三角に開き頭は鋭くどがっている。

幼稚園のころに読んだ絵本が何かで見たような姿だ。
まあ細かい事は気にしないでおく。実験台になれば何でもいい。

俺は再び目を瞑り力を溜め とかはめんどくさくなったので
やめて行き成りぶっ放す。意外と簡単にでた。

巨大なおばけのような何かは、木の板のように軽い音をたてて中央
に大きな穴を作る。おそらく光弾の着弾点だろう。
そして数秒後。黒いおばけを全て多い尽くすような、光の柱が生ま
れる。俺がイメージした通りの出来だった。

「ライトタワーグレネード……………いい出来だ」

威力、範囲共に完璧だ。そしてさらに俺のパーフェクトなネーミン
グセンスが加わることによって、最高の魔法が生まれてしまった。
素晴らしい……………。心の中でもう一度賞賛してしまう。

「お、そろそろ異世界に着くころか」

自然と理解できた。これも神様からもらった力の一部だろう。なん
て便利な力だと自分の事ながら感心してしまう。力の一端だけでも
これほど強力で使える能力なのだ。全てを使いこなしたとき自らが
どうなっているのか、考えるだけで身震いしてしまう。

光が晴れ、緑の大地と心地よい空気が眼下に広がる。

俺は空から落ちていた、定番のシチュエーションだ。真下は海岸で
落ちて死ぬ心配はないだろうが、そんな間抜けな姿を晒すつもり
はなかった。

世界を救う勇者には相応しい旅立ちをしなければならない。

「伝説の始まりだっ……………」

魔法によって背中に光の翼を顕現させ、俺は宙を舞った。

「……………」

飛行を続け数分経った。未だに落下中の感触と心臓の暴走が止まらない。呼吸も荒く全然落ちていてくれなかった。当たり前だ、生まれてこの方三メートル以上高いところから落ちた経験なんてない。なのに訳の分からない高さから数十、もしかしたら三桁あったかもしれない高さで急降下だ。これでビビらないやつはサイボーグか何かだろう。

さっきのカッコイイ地の文？ あれは魔法による後付です！（キリッ

まあそんな黒歴史は二秒で忘れろとして、魔王だ魔王。俺は世界を救うためにここにきたのだから。

「魔力探查発動」

別名チートレーダー。

説明しよう！ チートレーダーとはこの世界の何処に居ても見つかることの出来る超高性能レーダーなのだ。

「お、意外と近いな」

このまま真っ直ぐ進んだ先。方位で言うと北側に数キロはなれた所に魔王の魔力を発見。

辺りには山が聳え、魔王の城を守る外壁のようだ。この魔王は定番というものを理解しているようで、ご丁寧に毒沼らしき紫色の地面まで見える。

かなりの好感の持てる魔王のようだが、のんびりはしてられない。

なぜなら俺は、さっさと世界を救い姫様とイチャコラしなければならぬからだ！

誰かの嘲笑が聞こえたような気がしたが気にしない。

とにかくお約束なのだ。世界を救った勇者と、その世界の姫様がくっつくというのは。

その後待つ禁断の日々を思い浮かべるだけで涎が………っと、いけないいけない。

妄想はこれくらいにしてさっさと魔王を滅ぼす。

「光と闇の交わりしセカイの門を開き、混沌と清浄を司る神の力を借り」

魔法発動の為に永い呪文を唱える。具体的に意味があるのかどうか全くわからないが、きつとアピール点がプラスされていることだろう。

強大な魔力（的な何か）を手のひらへ集め、光弾として発射する。

「ライティンググレネード!!!」

微妙に名前が違うような気がしなくもないが、その場のインスピレーションが最重要なのだ。

とにかく、その光弾は魔王の城に落ち、光の柱となり全てを一瞬のうち消滅させる。

残るのは焦げた大地のみ。我ながら恐ろしい術を作ってしまった、ともう何回したか分からない自画自賛を行う。

「さて、姫様のところへ向かうか」

一息ついてから、最大の目的である姫様の元へ向かう事に決める。大切な何かを忘れていたような気がするが、そんなものは気のせいだと決め付けて先を急ぐ。

この世界の中心である城下町。中世のヨーロッパのような、という
ありがちな表現が思いつく景観で、そこは埋もれるような大量の人
間で賑わっていた。

「祭りだ祭りだー！」

「ついに魔王が倒されたぞーっ！」

というような声が慌しい人ばかりからいくつも聞こえてくる。
なんて耳の早い国なんだ、と呆れるような感心するような感想を漏
らす。

魔王の城へ近づいていた者からの伝言か、もしくは神様が気を利か
せてくれたのかもしれない。やるじゃん、と初めて神様を褒めよう
としたところで、とある発言が耳に入る。

「神様が魔王をやっつけてくれたそうだ！」

あれ……………？

魔王が倒されて嬉しさの余り叫ぶのは分かる。奇声をあげるところ
までなら俺も経験がある。

注目するべきところはそこではなくて……………。

「神様？」

「なんだ、知らないのかお前。昨夜姫様の元に神様が現れて伝えら
れたらしいぞ。魔王は私が倒すから安心しなさい、と。それでさっ

きの光柱だ。あんな事ができるのは神様しかないだろうよ!」

丁寧に教えてくれてありがとう、町人Aよ。けれど俺の心の中には怒りが沸々と湧き上がっていた。

畜生あのジジイめ。

この怒りをどうやってぶつけようか悩むのだが、方法が全く思いつかない。

様々な能力を使ってジジイを探すのだが気配すら見つかりそうになかった。おそらくもう会う気はないのだろう。

いつそ姫に直接　と一瞬思うのだが、どうがんばって説明しても納得しそうにない。力を見せても神の使いということで、俺へ評価がいくことはないだろう。

何処で道を間違えたのだろうか……。フラグ立てを忘れた所為か。

姫様とイチヤイチャという目先の餌に釣られ関係を作るのを全く忘れていた。

どんな勇者だって、ヒロインである姫様とはある程度の仲になってから魔王を倒すたびに出るといふのに……。

これは完全に自分の落ち度だった。

それを認めると、一気にやる気が失われてしまう。

「あー、これからどうしようかー」

やる事がなくなってしまう。世界を救うという事がこれほどつま

らないものだとは思わなかった。物語の中の主人公と現実の俺とで、こんなにも意識の差があるとは思わなかった。

さらに別の世界へ行つて、今度はきちんと勇者になる。というのを考える。

単純に面白くなさそうだ。というか一回失敗しているからやる気的にももう無理。

勇者とかないわー。

それに別の世界へ行つて、魔王が居るかすら分からない。もし居ない平和な世界だったらどうするよ。

「……………む？」

魔王の居ない？

魔王、なつちやえばいいんじゃない？

ナイス俺。これは良いアイデアだ。

別に異世界を楽しんで、姫とけしからん事をするには勇者で世界を救う必要なんで何処にもない。

むしろ逆。魔王のほつが色々と便利なんじゃなかるつか。

むふふ、と傍から見たら気直悪い事この上ない笑みを浮かべてしま

うが、最高の未来を思い描いた今の俺には全く気にならない。善は急げだ。今から俺がなるのは悪な気もするが、細かい事は知ったこっちゃない。

思い立ったら吉日とも言っし、早速もう一度異世界へ旅立とう。

自分のチート能力に疑いもせず光の扉を開く。

その先は、前の世界同じように澄んだ空気で、探知したところ魔王も存在せず、完璧な場所だといえる。まるで作られたような流れ。神は俺に魔王になれと言っているのかもしれない。あのジジイ以外の誰かね。

「さて、魔王軍を作っていくか」

行き成り世界を全て掌握しても面白くない。

勇者になろうとしたときの経験を生かし、今回は少しゆっくりと進めていくことにする。

もちろん、何ヶ月も何年も待つのは嫌なので、魔法によって時間を飛ばす。マジで万能だな、この力は。

作るのによく言えば定番悪く言えばありがちな理想の魔王像。使い古されたとはいえ、王道というものはいいものだ。

実際の時間で十数年。体感では一週間の時を経て、全ては完成した！

魔王の城に強力な僕、もちろん四天王も存在する。

徐々に人間の土地を攻め、ついに姫の待つ城まであとわずかとなった。

俺は王座に座り、祝杯を挙げる。

「ついにこの時が来た！ 全軍、人間を滅ぼ
」

あれ？

光に、包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9885v/>

色々間違えた異世界トリップ

2011年10月9日11時58分発行